

# 要 約

報告番号	① 乙 第 号	氏 名	色 本 涼
<b>主 論 文 題 名</b>  Predictive factors associated with psychological distress of caregivers of people with dementia in Japan : A cross-sectional study (日本における認知症介護者の心理的苦痛に関する予測因子：横断的研究)			
<b>(内容の要旨)</b>  人口の高齢化に伴い認知症者数は全世界で急増しているが、わが国においては世界に類をみない速さで増加すると予測されている。認知症者の多くは自宅にて家族による介護を受けているが、認知症介護者は心理的苦痛をみとめやすく、時にうつ病のような精神疾患にいたる。したがってこれら介護者の心理的苦痛のリスクを検討していくことが重要であるが、わが国において十分なデータによってこれらを検討した報告は行われていない。本研究の目的は、日本における認知症介護者の心理的苦痛に関連する予測因子を検討することである。デザインは横断研究で、日本における認知症の経済的評価の研究の一部として実施された、インフォーマルケア時間調査に参加した、1,437名の認知症者とその介護者を対象とした。評価項目は、認知症者およびその介護者の基本的背景、1週間のインフォーマルケア時間、Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia (BPSD) として幻覚、妄想、昼夜逆転、暴言、暴力、介護抵抗、徘徊、火の不始末、異食、性的逸脱行為の有無等とした。分析は、介護者の心理的苦痛をKessler's Psychological Distress Scale (K6) で測定し、その予測因子を重回帰分析およびロジスティック回帰分析を用い検討した。その結果、認知症介護者の69%はK6点数が5以上で、18%はK6点数が13点以上であった。重回帰分析の結果、K6点数は認知症者のBPSD、身体合併症、インフォーマルケア時間、介護度、介護者の性別、介護者の人数と関連した。ロジスティック回帰分析の結果、K6のカットオフを4/5とした場合、K6点数は認知症者のBPSD、身体合併症、インフォーマルケア時間、認知症者と介護者との同居、介護者の人数、介護度と関連した。K6のカットオフ12/13とした場合、K6点数は認知症者のBPSD、身体合併症、介護者の性別、インフォーマルケア時間と関連した。これらすべての解析方法において、インフォーマルケア時間、暴言、介護抵抗、徘徊はK6点数と関連した。またBPSDの中では特に、暴言 (OR 2.03; 95%CI 1.48–2.77)、介護抵抗 (OR 2.35; 95%CI 1.72–3.22)、徘徊 (OR 1.72; 95%CI 1.21–2.44) のオッズ比が高いことが示された。  本研究において、認知症介護者の心理的苦痛の点数は非常に高く、認知症者のBPSDが認知症介護者に関連していることを示した。これらの結果は先行研究に一致している。今後は、認知症者の精神症状を改善したり、介護者の負担を軽減するような介入の開発が求められる。			